

学校に行けない不安

彼女は、地域でトップの進学高校の1年生。高校に入学して初めての中間試験の後、今まで感じたことのない不安感で高校に行けなくなった。母親から相談を受け、彼女と面談した。

不登校になった子ども達にその理由を聞くと、みんな分からないと言う。勿論、その時の自分の気持ちを表現する語彙を持たないこともある。しかし、殆どの子どもはその理由に氣付いている。そう思いたくないから言わないこともある。気づいたその姿をクラスの同級生にさらけ出され、自尊心が傷つけられる恐怖や不安感で学校に行けなくなる。特に中学校でトップクラスの成績を取ってきた子ども達は、心のどこかで勉強ができない同級生を見下してきた。ましてや不登校になっている同級生は、「ちょっとおかしんじゃない」と思ってきた。

人は普通に自分が思っていることは、みんなも思っていると考える。そして、自分は集団の中で真ん中よりも上にいるという安心感で、周りの人たちを関わっている。集団より下にいる自分には耐えられない。それが人の心理原則である。（「脇役になれない子どもたち」桑島隆二著参照）

各中学校でトップクラスの子供達が集まる地域でトップの進学高校では、真ん中よりも上にいるという安心感を持つことは難しい。加えて、過去問演習でパターン化された問題を解き続けてきた子ども達は入試では高得点を取り、学力があると思いついてきたが、新共通テスト時代の思考力や読解力、判断力、表現力の要る高校の教科を理解するのも大変で、ましてやその試験ではおいそれとは得点は取れない。

夢叶って憧れの制服に身を通して挑んだ初めての中間試験で、現実の自分の姿を知る。自分の得点と平均点を比べれば、真ん中より上どころか、見下してきた同級生と同じ位置に自分がいることに気付く。授業も理解できず、当てられ答えられず、できない自分をクラスでさらけ出す不安に駆られ、学校を休み始める。そうすると、自分が以前不登校の子に対して思った「おかしいんじゃない」と自分が思われていると思いついて、益々学校に行けなくなる。前述の人の心理原則通りである。

我々の行う不登校解消プログラムとは、学校に行けない不安を言語化し、訳の分からない不安を失くしていく。そして例えば、勉強が分かるようになる指導を行い、明確化した不安を取り除いていく。あるいは、思いついてであることを認識させ、意識を変えていく。同時に、年齢に応じた生活習慣、例えば同級生と同じように、学校に行き勉強をすることができるように、心理的な訓練を行う。仕上げに行う交流合宿では、同世代の仲間たちと群れ集う中で、自分を知り、仲間たちを知る。そうした活動を通じてコミュニケーション能力を養い、精神的にも成長し、不登校を解消していく。彼女は、その一例である。